

室内サッカー論考 —南米を源流とする—

つと
柴田 昂

1. 不可思議なはずまないボールとの遭遇

原野を遊戯のステージとするマスフットボールは、古来自然との対峙を余儀なくされてきた。近代サッカーに進化を遂げた現在でも、この自然との対峙は避けられない。ことに、大地の上に半年もの間、雪を戴く北国のフットボールは、この間、ほぼ休眠状態に追いやられていた。

1970年ころ、冬期間のフットボール遂行の渴望と、1964年東京オリンピック大会を契機に創出された、日本サッカーリーグ（JSL）による近代サッカーの潮流が北海道にも周流し、伝播されるに至って、従前の半年活動型フットボールに先駆的な変革が求められるようになり、辺境性から先端性への転換を模索し始めた時期であった。当時、冬期サッカー訓練に有効なものとして、唯一体育館の利用法が挙げられていたものの、基礎体力系と基本技術系に偏した訓練内容が主で、最も成長期に重要な遊技性や競技性（ゲーム戦略・ゲーム感性等）の練磨・高揚の場を失っていたことが問題であった。そもそも、この辺境性を救う有効情報は北海道にも日本にも存在するはずもなく、やむなく方角を世界に広げて先進的国際情報の収集に奔走することになった。手もとに集まった資料は、スポーツ文化先進国の室内型フットボールの競技形態に関する資料が主であったが、イギリス、旧西ドイツ、アメリカ、オーストラリア、ブラジル、中国の6ヶ国から入手することができた。この資料によると、各国それぞれの特色をもっていたが、競技アスペクトのコアとなる「施設とボール」の対比から、次の3つのタイプに分類し各国の技術文化面の特徴をマークしてみた。

- 1) 5～6人制で、コートの上壁面利用によるリバウンドタイプの競技形態で、使用球は正規のサッカーボール（外周68～70cm）より一回り小さいサイズで、空気圧を少なめにおさえたものを使用
- 2) 5人制で平面のコートで行い、使用球は正規のサッカーボールより一回り小さいサイズで、空気圧を少なめにおさえたものを使用
- 3) 5人制で平面のコートで行い、使用球はかなり小型。ボールの外周が50～55cmで中国伝来の蹴鞠か東南アジアのセパタクローのボールサイズに近い。さらにボールのはずみは2mの位置から落下させて、ファースト・バウンドが30cm以下におさえられているユニークなボールを使用

この中で、3分類の3) ブラジルの「不可思議なはずまないボール」の異質性に特に知的好奇心を掻かれた。元来、鞠、毬、球、boal にもつ認識は、「弾むを常態とする球体構造」をなして、床に落下させるとはね返ってくるもの、と思ひこんでいるものにとって、未見のはずまない、ごく小型のボールによる競技のアスペクトを、容易に描けなかったこともあって、1972年12月ブラジルに渡り、以後、ブラジルの室内サッカー（Futebol de Salão = サロンフットボール）との対話が始まった。

2. ブラジル室内サッカー初発のアスペクト

1974年3月「第1回ブラジル室内サッカー調査」

（聴き取り調査および史的資料の収集）

- 1) 調査場所 サンパウロ・サロンフットボール協会（Federação Paulista de Futebol de Salão = F. P. F. S）
- 2) 調査協力者 F. P. F. S 会長イズ・ゴンザガ・フェルナンデス^{*1}氏
- 3) 調査内容 (1)ブラジルの室内サッカーの初発動機等について
(2)はずまないボールのなぜ？について
(3)競技形態の推移について
- 4) 調査資料 1974年2月、国際サロンフットボール連盟（FIFUSA^{*2}）発行の競技規則^{*3}（英文）の巻首部分に「室内サッ

カー発展小史^{*4}」が記載されているが、この記述を中心に補足説明を受けた。ここに、その「室内サッカー発展小史」の全文翻訳を参考までに書きしるす。

〈室内サッカー発展小史〉（Small Historical Development of Saloon Soccer）

室内サッカーの起源を知っている人はごくわずかであるが、ラテン・アメリカの人々の好みからすると、この室内サッカーは二番目にあげられる。それは、サンパウロのキリスト教青年会（the Associação Cristã de Moços = A. C. M.）のもとで1930年代に起こり、ホッケーやバスケットボールのコートで行われた。

1936年、サンパウロのY.M.C.Aは、雑誌 Revista de Educação（9月発行、第6号）において、Roger grain 氏によって書かれた室内サッカーについての最初の論文を発表した。その論文においては、他の競技のもっている種々の特徴をうまく取り入れたり、また、寄せ集めたりしているのに気づく。

上述の出版物では、ホッケーで使用されるゴール（1.98m×1.32m）に極めて類似した方形のゴールと、競技コートの利用法さらに競技の方法などが記述されている。

その頃までの室内サッカー発展の動機は、ボールにあったが、それは、バレーとか、バスケットに使用されるのと同じボールが、室内サッカーに用いられたためである。相違といえば、室内サッカー用として、そのボールの内部に空気を少なめに入れたことであり、それは、ボールがあまりにもはずむのをさけるためと、それを、より制球しやすくするためであった。ゴールの方形のフレームは、これまで理想的なものにしてきたと言われるが、野外のサッカーで使用されるものを小型にしたものにすぎず、もし室内サッカーのはじまりに、野外サッカー用のゴールのフレームが採用されていなかったとすれば、それは、多くのコートには十分なスペースがなかったためである。

1949年、A.C.M.の室内サッカー委員会は、初めて室内サッカーのルールを制定し、そして、室内サッカー普及連盟（Liga de Expansão

de Futebol de Salão) を組織したが、これが我々の知っている最初の室内サッカー選手権大会の実行組織である。サンパウロの多くのクラブがこの選手権に参加している。

それまでに使用されたボールは、コルクと鋸くずがつめられていたが、何年か後に、サンパウロ・サロンフットボール協会 (Federação Paulista de Futebol de Salão) と A. C. M. との間の研究結果として、馬の毛をつめた別のボールに変えた。

1955年、ブラジルスポーツ連盟 (Confederação Brasileira de Desportos = C. B. D) は、リオデジャネイロとサンパウロの連盟の出場許可を公表した。各連盟は、それぞれの州において Torneio Apresentação (トーナメント大会) と呼ばれた最初の公式試合を催した。その他の連盟も後に同様な試合を行った。

1956年、我々は、ほとんど時を同じくして、ゴムをつめたボールと、空気をつめただけの皮革のボールを考案した。この二種類のボールのどちらもが、非常に有効なものとして、それまで用いられていたボールに取って代わることができた。しかしながら、チューブも縫い目もなく、空気をつめただけの新しいボールは目下研究中である。

1958年の終わりころ、C. B. D は、国に対して室内サッカー最初の公式ルールを示したが、これは、C. B. D の Boletim official (公報) に記載されている。

Antonio Gomes da Cunha 氏は、我々の主要な援助者であった。1959年、最初の全国規模の選手権大会がサンパウロ市で行われた。

公式ルールのうち、ただ二か所の変更が1960年と1962年になされ、今日、そのルールは、南アメリカ室内サッカー連盟 (Soloon Soccer South American Conferation) によって公式発表後、全世界で用いられている。

1974年2月

F I F U S A 事務総長

Luiz gonzaga o. Fernandes

5) 聞き取り調査

① ブラジルの室内サッカーの初発の様子について

1930年代に A. C. M の18歳未満の少年達が、サッカー遊びとして行っていたものを、A. C. M の指導者がスポーツの種目として取り上げたのが最初である。開始された正確な年代は確認されていない。

② 発案者の特定

発案者の名は不明である。

③ 初発のルールについて

1949年にサンパウロのキリスト教青年会 (A. C. M) の室内サッカー委員会が初めて「室内サッカールール」を刊行している。これ以前は A. C. M 発行のパンフレットに書かれたルールによって行われていた。その起案時期については明らかではない。

④ はずまない特異なボールの開発の動機等について

1936年ころまでは、ゲーム中コート外にボールが弾き出されるのを防ぐため、ボールの空気圧を下げている。このことによって、ボールをコントロールしやすくなった。

1949年、このころまで使用されていたボールには、コルクと鋸くずが詰められていたが、この後、F. P. F. S と A. C. M との共同研究の結果、馬の毛を詰めたボールが開発された。

1956年、ラバーゴムと空気を内側に詰めた皮製のボールが開発された。このボールは、当時使っていたボールに取って代わる優れたものであった。

この後、現在使われている、チューブの中にラバーやウレタン・チップなどを充填し、空気を入れて弾みをおさえる方式の皮製ボールが開発された。

1987年7月「第2回ブラジル・室内サッカーの調査(組織と運営など)」

1992年10月「第3回ブラジル・室内サッカーの調査(競技力など)」

1997年3月「第4回ブラジル・室内サッカーの調査(初発に関すること)」

1996年6月 F. P. F. S 発行の「FUTSAL *5」ブラジル・室

内サッカー小史 (P. 73) に初発時のことが次のように述べられている。

「ブラジルの室内サッカーの起源として最も認められているのは、1940年代にサンパウロのキリスト教青年会 (A. C. M) に行き来していた若者たちによってプレーし始めたとする説である」。この1940年代説を採用したのは、現サンパウロ・サロンフットボール協会 (F. P. F. S) である。この根拠は、1930年代の初発に関する史的資料および初発当時の証人等の存在が未だ確認されていないため、1949年にサンパウロのキリスト教青年会 (A. C. M) の室内サッカー委員会が初めて「室内サッカールール」を制定した事実をもとに、1940年代の創始説をとっている。

3. 創始者の証言から得た「ウルグアイ室内サッカー」初発の аспек

長い間、ブラジルとウルグアイの室内サッカーの発祥をめぐって取沙汰されていたが、1993年12月ウルグアイ・サロンフットボール協会の協力を得て、計4回の現地調査を行い、ウルグアイの室内サッカーの源流に関する知見を得ることができた。

1993年12月「第1回ウルグアイ・室内サッカー調査 (予備調査)」
ウルグアイ・サロンフットボール協会 (モンテビデオ市) において、史的資料ならびに初発時の証人の存在を確認する。

1994年4月「第2回ウルグアイ・室内サッカー調査」

1995年3月「第3回ウルグアイ・室内サッカー調査」

《創始者 Juan Carlos Ceriani *氏 (モンテビデオ市在住) からの聴き取り調査》

① ウルグアイ・室内サッカーの初発の活動実態

起源は1930年9月から10月にかけて、モンテビデオ・キリスト教青年会 (A. C. J) のスポーツ指導の傍らで誕生した。

当時ウルグアイのサッカーは世界最強国といってよく、1923年に南米選手権 (ブエノスアイレス市) で優勝した後、1924年 (パリ大会)・1928年 (アムステルダム大会) の両オリンピックサッカー競技で連続優勝を果たし、1930年の第1回ワールドカップサッカー大会 (ウルグアイ) でも優勝を飾るなど、国内のサッカー熱は過熱状態になっていた。当然のごとく、子供たちの遊びはサッカー型に傾注し、モンテビデオのキリスト教青年会 (A. C. J) のスポーツ教材であったアメリカ発のスポーツ (バスケットボール・バレーボール) の指導になじまず、子供たちはボールと見ると蹴って遊んでしまう傾向が強かった。このため子供の熱意におされて室内の体育館に小さな椅子をおき、ゴールに見立てての小人数サッカーが始まった。ボールはバスケットボールやバレーボールを使ったが扱いにくいので、野球のボールなどを使ってゲームをさせた。これがウルグアイの室内サッカーの始まりである。

② 初発のルールについて

1933年、キリスト教青年会 (A. C. J) ラテンアメリカ連盟スポーツ技術委員長、ジェームス・サマーズ (James Summers) の依頼を受けて、モンテビデオ・キリスト教青年会 (A. C. J) のスポーツ指導者9名が既存の室内サッカーゲームの発展型のルールを草案した。この起案者9名のサインがなされた当時の原本が保管されている。

・保管場所……ウルグアイ体育協会 (モンテビデオ市)

③ はずまない特異なボールの開発動機等について

1930年の初発のころは、バスケットボールやバレーボールに変わって、野球ボールなどを使ったこともあったが、その後、サッカーボールを使うようになったが、ボールが弾むためにゲーム中コート外に出ることが多かったため、弾みをおさえるために、壊れたサッカーボールの中にもろきれやコルクを詰めて縫い合わせることによって、ローバウンズボールが開発された。

1933年制定のルールには、ボールの規格がのっており、外周が正

規のボール（68～70cm）より一回り小さい55cm以上60cm以下、重さは正規のボール（410～450g）より軽い350gとされていた。

④ 南米室内サッカーの普及の彰功国はブラジル

1933年ルールが制定されてから、キリスト教青年会・ラテンアメリカ連盟がスポーツ指導種目としてとりあげ、南米全域に普及されるようになった。とりわけ盛んになった国はブラジルである。特に、ボールの開発には熱心で、1940年代にはチューブの充填物であったコルクや鋸くずに取って代わって、馬の毛を詰めたボールを開発し、1950年代にはブラジルの工業技術を生かして、チューブの中にラバーゴムと空気を充填するタイプの、現在の使用球の原形が作られている。ブラジルは、この新開発のボールをもとに、南米全域およびヨーロッパにも普及の輪を広げていった。今では、室内サッカーの文化的ヘゲモニーはブラジルにあるといえる。

4. 南米室内サッカーの源流とその地平

1) ブラジルとウルグアイの室内サッカーの基緒の素描と背景

ブラジルとウルグアイの室内サッカー Futebol de Salão・Futbol de salon) の初発の様子、すなわち、両国における室内で行われていた足技型の競技としての初期の活動実態（初発動機・競技規則・弾まないボールの開発など）について、両国の現地収集資料をもとに考察をしてみる。考察の範囲は先史にまでおよぶ Pelada (蘭*) : Pelota (西*) = フットボール型遊戯(技)の史的追求はせず、本調査の主題にかかわるブラジルとウルグアイの室内 (Salão・Salon) で行われていた足技型の遊戯及び競技に範囲を限定して推究する。

ブラジルにおける足技型の競技の室内での創始については、1930年代と1940年代の2つの創始説が伝えられているが、ブラジルの初発のステージにいずれもキリスト教青年会 (A.C.M) の指導者とのかわりあい書きとめられている。このことは、ブラジルのA.C.Mとウルグ

アイのA.C.Jの布教組織としての隣国連繫という、身近な疎通関係の成立性から推して、すでに1933年、ウルグアイの室内サッカー競技規則を制定していたウルグアイのキリスト教青年会 (A.C.J) ラテンアメリカ連盟・技術委員会から従来型のスポーツ教材であった、アメリカ系室内球技 (バスケットボール、バレーボールなど) を凌駕する、子供たち主導の新たな室内球技の台頭を知らされていたのではなかろうか。この推測を裏づけるごとく、1936年サンパウロ市のY M C Aの機関紙「REVISTA DE EDUCAÇÃO FÍSICA MAGAZINE (Number 6, september Issue)」の中に、Roger Grainによって、ウルグアイ発の室内サッカーのルールと運用についての最初の論文が発表されている事実をあげることができる。これにより、ブラジルのA.C.Mと、ウルグアイのA.C.Jとの交流事実が明らかにされたと同時に、ブラジル側の情報授受経過年の順序が、発信側の情報年次と齟齬が生じるものではないので、ウルグアイ開発の新スポーツがキリスト教青年会の南米布教のサブ・サーヴとしてのスポーツ教導ネットワークを通して、ブラジルに移入・伝播されていったとみている。また、ウルグアイ側の史実による普及の流れが、ブラジルが最初で、次いでペルー、メキシコ、アルゼンチン、チリ、パラグアイに移入されていったとされていることも、ひとつの裏づけとなるであろう。

2) ウルグアイ室内サッカーの根基は「子供たちのサッカー遊び」

室内サッカーの初発動機では、ウルグアイ側に1920年代から1930年代にかけて、サッカーの世界最強国としての国内フィーバーが、子供にも投射され、子供たちのフットボール的遊戯本能を過熱させ、アメリカ発の手で行う室内スポーツを、足で行うスポーツに変えてしまった転化のプロセスが明らかにされており、その起源の年月と創始者の特定もなされている。創始者でF I F U S A名誉会長のJ.C.セリアニ氏に生前2度にわたる対面調査の結果得られた初発当時の史的資料は、現地関係団体などへの追調査でオーセンティックな文化財としての扱いを受けていることが確認できている。

3) 技術文化的側面から

ウルグアイでは、室内で行われたフットボールを立証する「ジュベントス・スポーツクラブ⁹⁾」の体育館が保存されていて、初発のコートの壁面に初発を証するメモリアルプレートが掲示され、文化財としての永久保存措置がなされている。

ブラジルの初発動機については、明らかではないが、サンパウロのA. C. Mの人たちによって、ホッケーやバスケットボールコートで始められたとされている。1930年代のこの種プレーコートは、屋外に設営されていることが多いのが気になるが、今もって、初発時が室内のコートであることの史実を詳明する資料は発見されていない。

さらに、スポーツの技術文化のコアとしての、ゲームおよびプレーの形態を方向づける、競技規則の制定時期については、ブラジルが1949年で、ウルグアイが1933年と早く、当時のウルグアイ・A. C. Jの起案者9名の特定もされていることから、競技としての形態生成の面からみて、ウルグアイが先行していることがわかる。

また、球技特性を決めるボールについては、南米型のサロンフットボールの特異性として、その使用球が弾まないことにあるが、この特異なボールの両国の開発の初発時の比較においては、

〈ブラジル側〉

1936年ごろまでは、普通のサッカーボールを空気を少なめにして弾みをおさえた。(F. P. F. S資料)

〈ウルグアイ側〉

1930年の初発のころは野球のボールを使ったが、その後、こわれたサッカーボールの中に充填物を入れて弾みをおさえた。(F I F U S A資料)

とされているが、両国ともボールの弾みをおさえた動機は、プレーイングコートがせまいために、ゲーム中ボールがコート外に弾き出されるのを防ぐための工夫であった、とされていることで共通している。しかし、ボールの中に充填物を入れるというボールの特質を生み出したのは、ウ

ルグアイであるが、現在使用されているチューブの中に充填物(ラバー片など)と空気を入れて弾みをおさえる、量産性のあるサロンフットボールを開発したのは、ブラジルである。

ここで、ボールを工業製品として知的所有権の立場から見た場合、その開発された時点の球体構造と、ルールオリジナリティを特許出願されていれば、創始の見かたを変えざるを得ないのだが、現在使用されているブラジル開発のサロンフットボールには、知的所有権の行使はみられない。このようなことから、両国の室内サッカーの創始の活動実態等について、その史的対比から言えることは、あくまでも、室内で行われ、かつ、フットボール的競技の形態を整えた時点を中心としてみて、ウルグアイの室内サッカーが初発の史的要件において、ブラジルの室内サッカーの初発より先行していたといえる。

なお、ブラジル・ウルグアイ以外の南米諸国における「弾まないボールによる室内サッカー」の発案国の有無については、南米全域にわたる調査がまだ完了していないので、今後の調査に待たなければならないが、1930年初頭から南米の普及組織に「キリスト教青年会ラテンアメリカ連盟」がかかわっていることから、ラテンアメリカ諸国への普及の道程で、何らかの、この種の球技の照合がなされているものと考えられるので、今のところブラジル・ウルグアイ以外の発案国の出現については否定的にならざるを得ない。

結語として、南米の室内サッカーの創始の発動源となったのは、「子供たちのサッカー遊び」であったこと。また、それを室内型の球技として、社会文化的側面と技術文化的側面を補強し、新たな競技種目として組成していったのが、ウルグアイのキリスト教青年会(A. C. J)である。

さらに、特筆されなければならないのは、弾まないサロンフットボールを近代型の工業製品として改良し、この球技を全世界に普及し発展させた国がブラジルであるということである。

注

- * 1 ルイズ・ゴンザカ・フェルナンデス (Luiz Gonzaga O Fernandes) F. P. F. S 会長と国際サロンフットボール連盟 (F I F U S A) 事務総長を兼務するサロンフットボールの国際的普及活動の第一人者。
- * 2 国際サロンフットボール連盟 (Federação Internacional de Futebol de Salão)
- * 3 国際サロンフットボール連盟発行の競技規則 (1974年2月) 「INDOOR FOOTBALL OR COURT SOCCER (OFFICIAL RULES)」(英文)
- * 4 室内サッカー発展小史 (Small Historical Development of the Saloon Soccer) 1974年2月、F I F U S A 発行の競技規則に記載されたもの。
- * 5 「F U T S A L」1992年ブラジル出身の前 F I F A 会長 Dr. João Havelange の提唱により「FIFA INDOOR (5-A-SIDE) WORLD CHAMPIONSHIP」香港大会の折に、正式に世界室内サッカーの組織が統一された。統一名称として、南米系の Futebol de Salão の短縮形として F U T S A L が採用され、世界室内サッカーの新競技名となった。
- * 6 Juan Carlos Ceriani (1907.3.9~1996.6.27) ウルグアイの室内サッカーの創始者。米国で体育の修士課程を終える。この間バスケットボールとバレーボールの創始者であるナシュミット (Nashmit) とモーガン (Morgan) に会う。その後、モンテビデオ市で Y M C A 南米連盟の事務局長として活躍。1992年2月、国際サロンフットボール連盟の初代名誉会長に就任。
- * 7 Pelada = ポルトガル語の pela (まり、球、ゴムボール) からきた形容詞で、ブラジルでは子ども (素人) の「サッカー遊び」を意味する。ほかに二流のサッカー試合をさす場合にも使われる。
- * 8 pelota = スペイン語で [小さいボール]、球の意味。中米や南米のスペイン圏では、「ボール遊び」をさすことばとなるが、この地域は伝統的にフットボール圏なので、通常は「サッカー遊び」をさすことばになる。
- * 9 ジュベントス・スポーツクラブ = SEDE SOCIAL Y DEPORTIVA 「JUVENTUS」場所は、Rio Negro y colonia. Pleno centro de Montevideo. Uruguay.

参考文献

- Luiz Gonzaga o. Fernandes 「Indoor Football or Court Soccer」
FIFUSA 1974
- Luiz Gonzaga o. Fernandes 「ブラジル・サロンフットボールの歴史、組織、運営等」

- Orlando DUARTE 「Futebol historias e Regras」
FIFUSA 1974
- Ricardo Lucena Ferreira 「Futsal e a iniciação」
FIFUSA 1974
- FIFUSA 「sede Social Y DEPORTIVA "Juventus"」
SPRINT LTDA 1991
- 柴田 昴 『ブラジルサッカー総覧』札幌大学学術図書出版助成
FIFUSA 1997